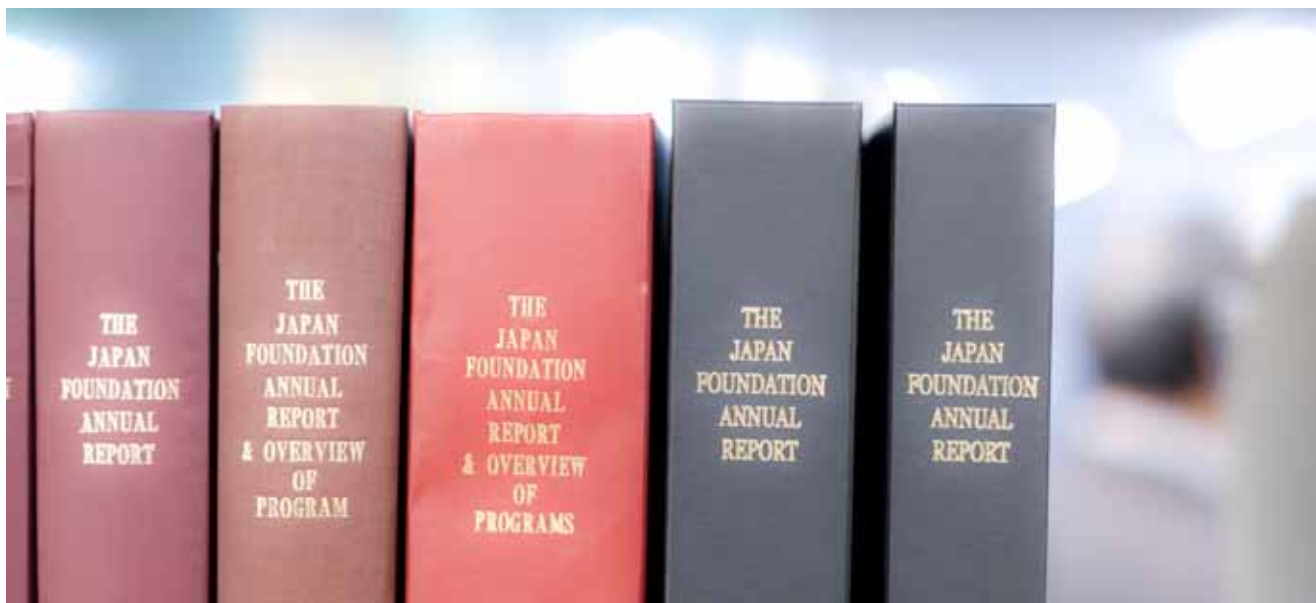


情報提供／国内連携

国際交流基金は主な3つの分野での事業のほかに、国内外の国際文化交流についての情報提供や、企業と連携した事業展開、国際交流について大学と共同研究を行っています。ここではそれらの活動について、そして京都支部の活動を報告します。



JFIC ライブラリー

撮影：相川健一

情報センター

ウェブマガジンの英語版を開始。シンポジウムで震災以降の世界の変化を語る

情報センターは、プレスリリースなどを発信する広報・メディアアリレーション業務を担うほか、国際文化交流についてのトピックを提供するウェブマガジン「をちこちMagazine」や年次報告書の発行、ウェブサイト、ブログ、ツイッター、メールマガジンなどによる情報発信、国内連携事業、国際交流基金賞や地球市民賞などの顕彰事業(P.8参照)、ライブラリーとイベントスペースで構成される情報発信拠点「JFIC(Japan Foundation Information Center)通称:ジェイフィック」の運営、大学生などの本部への見学・訪問受入れも担っています。

ウェブマガジン「をちこちMagazine」では、国際文化交流に関するさまざまなテーマで毎月特集を組み、2011年度は、「いま、日本語でつながる」「3.11後の社会」「クールジャパンの今」「時代と空間を越える文学」「韓国を、想う」「ドイツで北斎に出会う」などの特集記事を掲載したほか、国際交流基金事業に関わった専門家や国際交流基金職員による報告記事も多数掲載しました。また、英語版の「Wochi Kochi Magazine」も発行を開始しました。

JFICを活用したイベントも継続して実施しました。東日本大震災を受けて、国際シンポジウム「新しい世界ネットワークの可能性:文化で未来を切り開く—東北の心、アジアの声—」(共催:アサヒ・アート・フェスティバル(AAF)実行委員会)、シンポジウム「災害情報はどのように伝えられたか—多文化社会日本のメディア環境と課題—」(共催:NPO法人地球ことば村・世界言語博物館)を開催したほか、若手アーティストを対象とした「AIR! AIR! AIR! 海外でステップアップを目指せ!〈ノウハウ編〉」、在京大使館の文化担当官を対



[上] 若手アーティストを対象にした対話型セミナー「AIR! AIR! AIR!」

[左] 1930～40年代の報道写真界を牽引した名取洋之助、木村伊兵衛、土門拳らの写真家と山名文夫、河野鷹志らのグラフィックデザイナーがつくり上げたグラフィ誌『NIPPON』で構成した展示

象に震災後の日本の文化環境について情報提供を行った「カルチュラル・ミーティング・ポイント」など幅広い対象へ向けたイベントを実施しました。

JFICライブラリーでは、国際交流基金の実施事業に関する資料や、国際文化交流・文化政策に関する図書資料、外国語で書かれた日本を紹介する図書・映像資料などを所蔵し、図書の貸出やレファレンス・サービスを行っています。所蔵する貴重本などを紹介するミニ展示を月替わりで行っていますが、2011年5月から6月には「昭和初期のグラフィックに見るNIPPON—名取洋之助・木村伊兵衛・土門拳」と題して特別展示を実施、これに合わせて公開対談「日本工房と国際文化振興会」を開催しました。

デザインを通じて海外の若者と日本の交流を促進

事業開発戦略室は、企業と連携した事業展開やデザインを通じた若者の交流事業を通じた国際交流基金の商品開発などを行っています。これまで、学生を対象とした風呂敷デザインの国際コンテストを、さまざま開催してきましたが、2011年度は、日独交流150周年(2011年)、日イスラエル外交関係樹立60周年(2012年)をそれぞれを記念して、さらにポーランドと日本の文化交流強化を企図し、ドイツ、イスラエル、ポーランドの3カ国を対象としたコンテストを開催しました。「自国と日本の融合をイメージしたもの」というテーマで応募作品のなかから、それぞれのコンテストでの最優秀賞および優秀賞の2作品を製品化しました。

2012年開催の日韓学生パッケージデザイン交流事業に向けて、事前広報と学生の意識づけを目的に日本と韓国のパッケージデザイン協会の全面協力を得て、日本と韓国で学生対象のパッケージデザインフォーラム・ワークショップを開催しました。

また、東日本大震災に際して世界中から日本に寄せられた温かい支援に対する日本人の感謝の気持ちを表し、あわせて日本の復興への決意を伝えるために、映像作品『東日本大震災の記憶-世界の絆に感謝-』を財団法人太平洋観光交流センター



[左] イスラエル・日本の学生によるふろしきデザインコンテストのポスター
[右] 日本と韓国で開催された学生対象のパッケージデザインフォーラム・ワークショップの様子

(APTEC)と共同制作し、国際交流基金の海外拠点など世界各地で上映し、災害や震災からの復興に関するシンポジウム、東北観光をテーマにする講演会などを行いました。

これら事業のほか、海外における日系企業の社会貢献活動を通じた国際文化交流の推進に資する事業も継続し、2011年度には、マレーシアでの日系企業の社会貢献活動の調査を行いました。

国際交流共同研究センター

国際交流の技法を研究し、分析・評価する

国際交流基金が青山学院大学と連携・協力して運営する国際交流共同研究センター(Joint Research Institute for International Peace and Culture)は、国際交流についての研究、活動の分析・評価ならびに国際交流技法の開発などの研究を実施し、その研究成果を広く社会に還元することにより国際交流の発展に寄与することを活動の目的としています。2011年度には、平和構築における文化の役割に関するシンポジウムや多文化共生と国際交流に関する講演会などを開催し、研究紀要『Peace and Culture』第4巻を発行しました。



2011年7月にバンコク芸術文化センターで開催された国際シンポジウム「Reflecting Conflicts Through Cultural Initiatives: Perspectives from Southeast Asia」

京都支部

関西圏の文化の担い手との連携し、国際交流を推進

京都支部は、関西圏のさまざまな国際交流の担い手とのネットワークを活かしつつ、海外からの留学生・研究者など外国人を対象とした日本文化紹介活動を推進しています。

和菓子の手づくり体験や、酒造りの工程見学、錦織物の工房訪問などの体験型プログラムや、能・狂言等の舞台公演、日本映画の上映会など外国語解説付きのプログラムを通して、日本文化に触れる機会を外国人のたたちに提供しています。「国際交流のタペ——能と狂言の会」は1974年から実施し、2011年度で第38回目を迎え、会場は約420名の来場者で埋め尽くされました。

また、国際交流基金が招へいする日本研究者による講演会、セミナー、懇談会などを通じて、国際交流に関心をもつ市民との対話や交流を進めています。2011年度は、アレックス・ベイ

ツ氏(米国)による「災害と文学：関東大震災」についての講演会等を実施しました。



[左] 能「雪」金剛永謹師 [右] 狂言「鎌腹」茂山千五郎師(右) 2点とも撮影：高橋章夫